

第三百二十七回 青葉会

平成二十五年六月二十七日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

安部眞希子 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか

〈投句〉

中野一灯 山崎亜也 山内天牛 伊賀山そらお 石川清 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 南平和夫

宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 星田啓子 村田くに子

〈紙上選句〉

《選者吟》

亡きひとと逢ふ夢つづき明易し
藩校の回廊閑か新樹光

万里子 (五・敏・隆・く・三)

全 (孤・允・正・く)

(正↓人気無き藩校回廊新樹光)

手料理へ手間暇かけて梅雨籠り

全 (ゆ・青)

詩筵へと梅雨の晴れ間を逸る旅

全 (紀・恭)

荒梅雨や若き日からの詩友逝き

全 (紀)

《互選句》

七点 團十郎の声無き声や遠火花

六點 ☆方言でメールが届く徽雨(はいこ)の夜

五點 ☆ゴンドラの万緑を抜け天空へ

眞希子 (孤・五・弘・允・天)

河東節樂屋

且那衆の樂屋を見舞ふ紹の年増

紀久男 (眞・敏・允・亜・天)

助六の啖呵に晴るる梅雨の憂さ

恵洲 (堅・猛・敏・灯・く)

☆両蛙そげな所で何ぼしよると

規雄 (万・眞・猛・龍・啓)

☆父の日の吾を越えゆく子の酒量

盛雄 (万・猛・忠・龍・灯)

窓に凭り梅雨満月の光受く

恭延 (堅・忠・孤・五)

鬼灯市

鉢植えに藪蚊も一緒買ひにけり

忠彦 (猛・恭・ゆ・天)

☆船旅やドナウを跨ぐ二重虹

一灯 (万・弘・允・青)

梅雨晴間紙より薄きカンナ屑

正明 (眞・恭・く・三)

微雨やまず紫紺でかすむ菖蒲園

そらお (紀・龍・く)

(水郷佐原)

ラクロスの星獲り人のごとき夏

弘子 (五・亜・三)

名は要らず夏山はただ清くあれ

健介 (堅・忠・三)

浴衣吹く夜風や糊の肌ざはり

一灯 (弘・ゆ・正)

(正↓夜風かな浴衣の糊の利き具合)

腑の奥をそろりそろりと蝸牛

盛雄 (忠・五・亜)

☆急行の通過待たされ草いきれ

眞希子 (万・天)

☆出産の床上げ祝ふ初鱈

全 (万・孤)

☆押隈に画賛の遺句や白牡丹

紀久男 (万・龍)

(☆下五は別の表現にしたら?)

観音を拝み紫陽花の山に入る

恭延 (眞・三)

雨上り初孫生れる五月晴

忠彦 (龍・三)

菊坂の燕に広き梅雨の空

弘子 (五・允)

ゴシックは選者の天

神苑の茂り深々雨を吸ふ
夏蝶のひらと昇りし立石寺
☆ 昼席の閑散として梅雨闌(と)くる
☆ 蛭狩ほたる追ひある人を追ふ

赤茶けし父の遺影の夏帽子
眉織(ほ)き紗のひとの香に振り返る
梅雨晴やワイシャツの襟叩き干す

(青:生活実感のある句)

徽兆す書架の奥より智恵子抄
青簾動機はいつも隠される
甘藍を畫題と決めてキヤベツ描く
六月や助六小振り河東節

(十日所見。仲日:十六日以降は修正し見事)

長崎からあばた面した夏蜜柑

一点

☆ 白薔薇新生児てふ二週間

どんぶりのシラス輝き夏來たる

黒南風や買物無事の妻を待つ

花道の助六消えし梅雨の闇

梅雨晴間その長きこと雨恋し

花菖蒲和服姿の麗人か

夏至の夜酒場の喋り絶好調

空梅雨や戦後未だに不発弾

国際裁判

オタクサや捕鯨を止める時なるか

夏遅しシロツコ立ち来て波騒ぐ

夏來たる運河にあまた船浮かぶ

リラぞ咲く運河の先のシナゴウグ

遺産とは諸刃剣か夏の山

(青:中七↓「諸刃の剣」。俳句は断定の型にするのが望ましい)

夏期賞与妻のそろばん跳ねし日も

(青:下五↓「跳ねる日よ」。俳句は出来るだけ現在形で詠みたいもの)

甚平着て読む「草枕」すがすがし

風鈴の音に庭草のそよぎをり

里山や緑深まる田植毎

丘の上眺める車両夏の陽

青唐の小さきを酢漬けて先端(さ)きを食む

同憂の士のゐて専一草むしる

妻くれる快気祝ひに夏帽子

梅雨寒や自慢話で気を晴らす

弘子 (堅・允)

全 (啓・天)

惠洲 (万・正)

堂哉 (万・天)

ゆたか (隆・く)

一灯 (敏・啓)

全 (弘・青)

全 (ゆ・啓)

正明 (ゆ・亜)

亜也 (敏・三)

天牛 (紀・忠)

全 (恭・灯)

眞希子 (万)

そらお (天)

清 (紀)

紀久男 (敏)

猛 (啓)

全 (隆)

全 (亜)

忠彦 (紀)

五郎太 (紀)

全 (龍)

全 (正)

全 (灯)

健介 (青)

堂哉 (青)

ゆたか (孤)

全 (堅)

和夫 (紀)

全 (正)

亜也 (猛)

全 (恭)

天牛 (隆)

全 (恭)

●次回青葉会

七月二十五日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

八月二十二日(木)

九月二十六日(木)

平成二十五年六月旬会報

一 今回は数年ぶりの眞希子さん始め12名出席。投句10名。御覧のように正明さん、忠彦さんが高得点でした。先生と眞希子さんからの信州土産「雷鳥の里」(大町)とガーリック塗りトースト、弘子さんからの伊勢土産「伊勢海老せんべい」、五郎太さんのチュニジア土産ナツツチョコ(カクタゴ)、小生の伊賀大吟醸「半蔵・雫酒」：平松(旧姓・古市)さんからの楽屋見舞いと新潟銘酒「峰の白梅」と寄贈の数々。健啖の皆様にはとても足りずどんどん追加。清さん、和夫さん、規雄さんの病状思い遣りつつ時間超過して仕舞ました。

二 関係者近詠

初花や老樹を囲む墓に	万里子	岡の上の社宅の小さき夏座敷	規雄
朱に臙脂映え合ふ御苑の躑躅かな	全	— NHKテレビ七月七日放映 宇多喜代子選	
母子共全き白髪花の下	眞希子	兼題「夏座敷」(五月青葉会で3点 保土ヶ谷荘の由)	
春風邪とあの一言が居据われり	全	富士山が世界遺産にビール大	正明
夜泣き子の朝寝を覚ます食器の音	全	あやめ咲く投票率は最低で	全
母の手をつかむ児のける児入学日	全	食欲不振パステルで描く夏みかん	全
牧師館のつつかけちびて山椒の芽	全	スピノザがレンズを磨く梅雨晴間	全
たつふりと見る平日の春の海	弘子	(五月最高点句への青史さん句評に返事の由)	
するすると胸より乾き甘茶仏	全	夏負けや左に曲る筈なのに	全
躑躅咲く皇居の庭は新天地	恭延	陸奥の青田ひろがる雨の中	允章
春空に見ゆ父の顔母の顔	和夫	雪溪の遙か老鶯のひた鳴ける	全
のつたりと黒鯛一匹釣り上ぐる	全	残雪のかたへに湯壺雲の峯	全
勘三郎に捧ぐ「お祭」に孫が初舞台	紀久男	又入院又も入院梅雨晴間	規雄
主役食ふ二歳の孫や花の幕	全	(腸閉塞で毎月のように入院の由)	
花曇球音下から四ツ谷土手	全	額の花病院食の旨きこと	全
— 「萬緑」七月号 —		さつき雨眠れぬままの作句かな	全
咲き上る胡瓜の花に小雨かな	允章	紺碧の空を零して落雲雀	孤舟
花栗のひときは匂ふ雨の間	全	生ビールに串は一本店巡る	堂哉
全身を笛となしたる四十雀	全	(ジャンジャン横丁)	
機嫌よき上座の老師夏座敷	恵洲	緑さす午後寛ぎのミントテイ	全
悪びれぬ殿(しんがり) 走者若葉道	全		

三 柿落し「助六」御見物有難うございました。切符取れずお断わりせざるを得なかつた皆様には謹んでお詫び申し上げます。従い当会吉例「助六旬会」の参加者も大幅に減っております。六月旬会掲載句を除いて紹介します。

海老蔵の啖呵の切れや暑気払ひ	正明	助六の隈取若し夏の月	彦十
助六の下駄の響きや梅雨晴間	全	助六の見得助けたり河東節	啓子
助六が何故か夏瘦せジエジエ	全	夏瘦せの海老蔵助六祖父写し	紀久男
助六の背負ふ荷物や花菖蒲	全	花芍薬供ふ由縁ののれんかな	全

七月十三日

紀久男記